

(別紙 1)

論文の内容の要旨

論文題目 The Acquisition of English and Japanese Measure Phrase Comparatives
(英語と日本語の度量句を含む比較構文の獲得)

氏名 有井 巴

本論文は、子供が形式から意味への写像をどのように学習するかを明らかにするために、修飾語としての度量句の解釈の獲得を調査した。対象としたのは英語と日本語である。これらの言語には、度量句が形容詞を修飾する際に持つ可能な解釈の範囲に関して違いが見られる。英語では、形容詞を修飾する度量句は絶対的な測定と差の測定を表すことができる（例えば、*This building is 10 meters tall.* (絶対的測定) と *This building is 10 meters taller (than that building).* (差の測定)) のに対し、日本語では、度量句は差の測定しか表すことができない（「このビルは（あのビルより）10メートル高い」(差の測定)）。そのため、これらの言語を習得する子供は、形容詞と度量句からなる構文に関してどのような解釈が可能でどのような解釈が不可能なのかを学習しなければならない。本論文では、英語児と日本語児がこのような文法知識をどのように獲得するかを明らかにした。英語の *This building is 10 meters taller (than that building).* や日本語の「このビルは（あのビルより）10メートル高い」のような差を表す解釈を持つ構文を、「度量句を含む比較構文」と呼ぶ。差の測定は、形容詞の比較級用法に伴うものなのである。本論文では、様々な実験を通して、英語児と日本語児の度量句を含む比較構文の解釈を詳細に調べた。その結果、英語児も日本語児も同様に当該構文を誤って絶対的に解釈することが判明した。例えば、英語児は *This building is 10 meters taller (than that building).* を ‘This building is 10 meters tall.’ と解釈する。従って、英語児と日本語児がどのように絶対的解釈を排除し、差を表す解釈を獲得するかについて、説明が求められることになる。

第1章では、英語と日本語に度量句の解釈に関する言語間変異が見られること、英語児と日本語児が度量句を含む比較構文を正しく解釈できないことを簡単に述べた上で、言語獲得理論が当該構文の獲得を説明しなければならないことを確認した。次に、「度量句を含む比較構文は絶対的解釈を持たない」という否定的証拠は子供が接する言語データから得られないと論じた上で、当該構文の獲得は保守的学習モデルでは説明できないことを主張した。そこで、どのような説明が可能かを模索するために、これまでの言語獲得研究が、実験における子供の大人と異なる振る舞いをどのように説明してきたかを確認しておく必要が生じる。言語獲得研究で最初に取りられる方策は、子供が大人と異なる振る舞いを見せた実験のデザインを吟味することである。そうすることで、実験デザインの欠陥や、実験結果が誤って解釈されていたことが明らかになる場合がある。このとき、実験デザインを修正することで、大人と子供が同じように振る舞うという結果が得られる可能性がある。実験デザインを吟味・

修正しても子供の振る舞いが改善されない場合には、一般的に成熟アプローチと文法的アプローチの2種類の考え方があり。成熟アプローチでは、子供の大人と異なる振る舞いは未発達な文処理能力、あるいは未熟な文法知識によるものとする。そのため、子供が大人と同じように振る舞うようになるためには、特別何かを学習する必要はなく、成長とともに自然とできるようになると説明される。一方、文法的アプローチでは、習得対象の文法知識は子供が接する言語データにおいて観察可能な別の文法知識の帰結として獲得されるという文法モデルを前提とし、文法知識の獲得は肯定的証拠のみで説明される。本論文は、度量句を含む比較構文の獲得を文法的アプローチに基づいて説明し、また当該構文の獲得はなぜ時間がかかるかを成熟アプローチに依拠して説明したものである。

第2章では、比較構文に関するこれまでの理論研究をまとめた。まず、比較構文一般についての分析を概観し、次に、度量句を含む比較構文に関する3つの分析を比較検討した。第3章では、度量句付き比較構文に含まれる文法要素（すなわち、形容詞、度量句を伴わない比較構文、度量句）の理解と発話に関する発達についての先行研究を確認した。

第4章では、英語児と日本語児の度量句を含む比較構文の解釈を調べた6つの実験の結果を提示した。これらの実験は、英語児・日本語児ともに当該構文を一貫して絶対的に解釈すること、また子供の絶対的な解釈は非常に強固なものであることを示している。子供は、*than* や「より」などの基準を示す句の有無にかかわらず、絶対的な解釈をする。また子供の絶対的な解釈は、形容詞の種類や極性にも関係ない。このような大人と異なる度量句付き比較構文の解釈は5～6歳まで続く。一方で、子供は度量句を含まない比較構文（例えば、*X is taller than Y*）は正しく解釈できる。つまり、子供の誤った解釈の原因は度量句にあるとすることができる。さらに、この子供特有の解釈は、順次処理や算術の能力など文法以外の要因や非合成的解釈に起因することはできないことも論じた。

第5章では、度量句を含む比較構文の獲得に関して、子供は肯定的証拠により差を表す解釈を獲得し、その結果として絶対的解釈を排除する、という文法的説明を提案した。子供が絶対的解釈を最初に選択してしまうのは、比較の基準を正しく設定できないことに起因すると主張した。本論文では、比較の基準を制御する文法モデルとして、Sawada and Grano (2011) が提案した理論モデルを採用する。Sawada and Grano (2011) は、度量句が *Meas* という音形を伴わない機能範疇によって構造上導入されると提案した。この分析においては、大人の文法で使われる *Meas* は、それ自身と結合する形容詞に対し、測定尺度が最小値を持っているものでなければならないという選択制限を課す、とする。この分析を踏まえ、本論文は、子供の文法における *Meas* (以下、*Meas_{child}*) はより厳しい選択制限を形容詞に課すと提案した。*Meas_{child}* はそれ自身と結合する形容詞が「ゼロ」を最小値として持っていなければならないという選択制限を持つ、と考えるのである。比較構文における形容詞が比較の基準を最小値にとるとすると、子供は“*X is MP taller*”のような基準を示す句を含まない度量句付き比較構文を解釈する際に、比較の基準をゼロに設定する。そのため、当該構文を‘*X is MP taller than the absolute zero*’と解釈する。この比較構文が子供の絶対的解釈の基底表示である。また、“*X*

is MP taller than Y”のように基準を示す句を含む度量句付き比較構文を解釈する場合には、基準を示す句の値がゼロではないので、明示された比較基準値と $Meas_{child}$ の要求に矛盾が生じ、子供は一貫した解釈を生成することができない。そこで、子供は当該構文の一部を無視して解釈するか、非合成的な解釈をし、大人とは異なる様々な解釈をすると提案した。

子供が度量句付き比較構文を大人と同じように解釈するようになるには、 $Meas$ の選択制限を変更する必要がある。 $Meas_{child}$ は大人の $Meas$ より狭い意味での最小値（すなわちゼロ）を要求するので、子供は基準を示す句を含んだ度量句付き比較構文を耳にし、 $Meas$ の選択制限を緩めることで、大人と同じ語彙項目を持った $Meas$ を獲得することができる。つまり、大人と同じ $Meas$ の獲得は肯定的証拠のみで説明できると提案する。これにより、子供は正しく比較の基準を設定することができるようになり、度量句付き比較構文に差を表す解釈を大人と同様与えるようになる。その結果、絶対的解釈は消失することになる。

また、度量句を含む比較構文の獲得になぜ時間がかかるかについては、成熟アプローチを用いる説明を提案した。 $Meas$ の語彙項目を変更するために必要な言語データ（つまり、基準を示す句を含んだ度量句付き比較構文）を明示的に与えられる機会は数多くある。それに関わらず、5～6歳になっても正しく度量句付き比較構文を正しく解釈することはできない。このことは、度量句を含む比較構文に必要な言語データを与えられても、子供は長い間それを使うことができないことを意味する。本論文ではその理由を、当該語彙項目を変更するには、情報処理に大きな負荷がかかるためだと提案した。この場合、子供は当該語彙項目を変更するために特別何かを学習する必要はなく、成長とともに情報処理能力が成熟することで、自然と変更することができるようになる。

第6章では、本論文が明らかにした実験的知見、および度量句付き比較構文の獲得に関する提案をまとめた。また、形式から意味への写像の獲得一般について、これらが示唆するところを述べた。